

札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる 2025 年連絡協議会

令和 6 年度第 2 回札幌市発達障がい者支援地域協議会全体会

日時：令和 7 年 2 月 4 日(火)13:30～16:20

手法：オンライン

【1部】 13:30～14:45『札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる 2025 年 連絡協議会』と、『札幌市発達障がい者支援地域協議会』の合同開催

【2部】 15:00～16:20『札幌市発達障がい者支援地域協議会』

※会議は 2 部制です。なお、以下の記録は1部のみとなります。

.....

第1部

札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる 2025 年連絡協議会

議事録(案)

(1) 会議説明 事務局

札幌市障がい福祉課発達障がい担当係長 東委員

本日の会議について、今年度より新しい取り組みをしている。

※以下、札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる連絡協議会を「おがる連絡会」

札幌市発達障がい者支援地域協議会全体会を「発達協議会」とさせていただく

昨年度までおがる連絡会と発達協議会は別々の会議体としていたが、似たようなメンバーが委員になっていることから、委員の方の予定確保の負担を最低限にするため、同日開催をしていた。しかし、同日開催で長時間会議に時間を割かれることとなった。二つの会議は発達障がいという切り口は同じであること、他自治体でも合同開催しているところもあるということから今年度は試行実施として合同開催とした。今後については皆様の意見を聞きながら次年度以降の実施の仕方を考えていく。

(2) 札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる、発達障害者地域支援マネジャーの令和 6 年度取組報告・次年度計画・課題について

【要約】

1. 発達障害支援センターとして、地域支援、間接支援、研修、普及啓発活動に力を入れている。特に機関支援の件数が増加しており、180 機関、688 回の訪問支援を行っている。
2. 次年度の課題として、間接支援の効率化、研修体制の見直し、家族支援の整理が挙げられた。特に家族支援については、各機関が役割の迷いを感じているため、支援内容の整理と共有が必要とされている。
3. 強度行動障害を有する方への集中的支援試行プログラムを実施しており、今後はプログラムの前後のフォローアップ体制の構築が課題となっている。

センターは多機関との連携を重視し、地域全体で発達障がい支援の体制を整えていくことを目指している。

【今年度の取り組み報告】

発達障害者支援センターの役割はいくつかあるが、支援の層が広がっており、支援対象者もさまざま。今は診断がない方や通常級のお子さんについての相談が多くなってきた。各機関と連携してネットワークを構築しながら地域の支援体制を整えていく必要がある。

センターは幅広く、発達障がいに関する全般の仕事をしている。発達障害者支援センターの中には地域支援マネジャーもいる。マネジャーは支援困難度が高い方を中心に機関支援や支援会議、もしくは研修などを行っており、現在は 3 名配置している。当事者やご家族からの直接相談は受けていない。センターとしては電話相談や来所相談で行ってはいるが、機関支援や研修がメインになっている。

センターとしては、地域支援がメインの業務。いろいろな会議で発達障がいの話題を共有している。

- ・ 間接支援について、札幌は全国的に見ても数が上がっている。今年度は 12 月までみて 180 機関となっている。研修会も 198 回、毎日スタッフの誰かが研修をやっているような状況。そのほかケース会議にも参加している。これも間接支援の一環。
- ・ 直接支援としては電話相談。札幌では相談機関が多いので、必要な役割のところにつなげていく。大人の方で支援者がいない、という場合には継続してつながっていく。
- ・ 研修会は、支援者向けの研修や一般向けの研修をおがる主催や親の会との共催で行なっている。オンデマンド研修なども含めいろいろな研修を展開している。
- ・ 普及啓発についてはポプラ会さんと協力したり、カラフルブレインなどのイベントを行なっている。また、SNS を活用し、指定管理のセンターとして正しい情報を提供してる。
- ・ トライアル実践については、発達障がいに関する支援方法がいろいろある中で、地域で定着しなかったり、使い方がわからないということについて、おがるで実際にやってみて、地域に還元していく。何年か前には早期療育の取り組みを保育園や幼稚園向けに行なった。現在はトスプログラムと言って就労準備支援プログラムをしている。HP にも取り組みが掲載されている。今後は地域に還元できるようなパッケージを作っていく。また、見えてきた課題として、大学生活の困り感をどう支えていくか、就労支援機関とのつながりをどう作っていくかということも課題。
- ・ 調査・報告については、昨年度保護者支援のアンケート調査を行なっている。保護者支援については、いろいろなプログラム(ペアプロ、ペアトレなど)があるが、その際にも課題があるということ。現在保護者支援のメニューを整理している。
- ・ 発達障害者地域生活支援モデル事業の取り組みについて、強度行動障がいを有する方に、集中的支援試行プログラムを実施。今年度は地域の事業所にモデルケースを募集して取り組んだ。

【次年度の取り組み】

- ・ 間接支援: ニーズが非常に多い。評価表でお互いのやり方を共有したり、ノウハウの整理をしている。札幌市は訪問支援をする機関が多くあるので、情報交換などしながらうまく棲み分けや整理をして、お互いのノウハウを共有しながら、札幌市の間接支援として展開していきたい。
- ・ 主催研修: 支援者向け研修の発達障がい講座スタート、スタンダードは何年も行っており、システマティックになってきており、受講者も増えている。地域にいろいろな研修があるので、地域課題に合わせて研修体制を考えていく。
- ・ 家族支援: アンケートなどから課題が見えてきた。ガイドラインにもペアトレ・ペアプロが載っているが、茶話会や学習会、面談など家族を支えていく方法はさまざまあるので、家族支援は何かということを情報交換しながら、各機関で家族支援の役割を整理していくことが必要。
- ・ 発達障害者地域生活支援モデル事業: 集中的支援について、札幌市としてプログラムをどのように提供していくのかなど準備が必要。また、プログラムを実施して終わりではなく、その後のフォローをどうしていくか、プログラム前後の動きに関しても課題になっている。令和8年度、集中的支援を実装しようという流れになっているので、それに向けての準備を進めていくのが次年度の取り組み内容になる。

マネジャー業務もセンター業務も、1機関だけで進めていくことは難しい。役割を整理しながら皆様と連携していきたい。

(3) 質疑応答・意見交換

- ・ ぼらりす いちこ委員: 機関支援数などの資料は入っているか→入っていない
- ・ 札幌ポプラ会 松岡委員: モデル事業の中核支援のところで、その件数は?→今年度モデルケースとしては2事業所、入所施設と生活介護事業所となっている
- ・ ぼらりす いちこ委員: 機関の保護者支援メニューのところの説明をもう少ししてほしい→スキル学習会が話題になっているが、ペアトレやペアプロをしてもニーズとマッチしていなかったというようなこともある。学習会にもいろいろあるので、それぞれの機関に必要なものを、目的をもってやっていくことが大事。それらを整理するために、おがるではアンケートを実施し、そこから考えている形になっている。
- ・ ぼらりす いちこ委員: 大学生の支援について、合理的配慮が義務になっているが、大学ごとの差が激しい現状がある。大学に入る前に、入学後の生活がどのようになっていくのかなど情報を得られると良い。札幌周辺モデルのような形で、どこの大学に行っても最低限のスタートラインが整っており、大学での学びを充実させていけるものができたら素敵だと思う→ひとつのプログラムで全てを救えることはないので、層を意識したプログラムを作成したり、話題を提供していく必要がある。一地域やそれぞれの環境でできることをおがるとしても一緒に考えていきたい
- ・ 北星学園大学 永井委員: 大学生の支援ということで、どこの部署と連携して進めているのか→学生相談室のスタッフさんがメインでプログラムは進めてきた。キャリア支援課などにもご協力いただいた。ただ、障がい学生を大学として支援していく組織がない大学もあり、大学内の連携も課題となっている。おがるでも学生支援についてはまだ取り組み出して3-4年というところ。トスプログラムの参考になっているのはノースカロライナ大学のT-STEPというプログラムで授業の中で取り組んでいる。その仕組みから考えると学生相談室主催で実施していく難しさはあるので、今後も皆さんの力をお借りしながら取り組んでいきたい

- ・札幌ポプラ会 松岡委員:各機関が家族支援での役割がわからないとなる背景には何があるか→各機関が、自分たちがどこまで保護者支援を行っているのか、レギュラーとしてどこまで付き合ったらいいかわからないというような意見がアンケートから出ている。支援の状況についてはサービスは増えているが、サービスが増えた分メリットデメリットがあるように感じる。昔はサービスを使う人が限られており、使う理由もはっきりしていた。今は何の目的で支援しているのかということが不明瞭であることも多いので、そこについて機関支援の中で確認しながら取り組んでいる。
- ・おがる 多田より:数年前まではご本人の支援が話題だった。近年はご家族の支援をどうしていいかと聞かれることが増えた。そのサポートについてガイドラインでも明文化され、よりやっていかなければいけないようになってきて、具体的にどうしていいのかわからない様子。おがるからこうしてくださいということではなく、札幌市としてどうしていくのか地域に合わせた家族支援を考えていけたらいい
- ・札幌ポプラ会 松岡委員:ポプラ会も月に1回茶話会開催。会員でなくても参加できるが、年齢を重ねた方のご家族が飛び込みでくる印象。お子様が小さい方はなかなか相談につながってこない。
- ・子ども部会 河内委員:間接支援が多いということと言うと児童発達支援センターが役割を担わないといけない部分も多いのではないかと→おがるとしては間接支援が札幌市で増えて、それぞれの機関で行われていくのが理想的な動きではないか、そうしていかないと当センターの機関支援先が年々増えていき対応が難しくなる。取り組みとして児童のマネジャー向けにこれまでのノウハウをお伝えするような機会もあったので、今後必要であれば作っていきたい。役割分担しながら進めていきたい。
- ・おがる 坂井:研修について、ニーズなどあればご意見いただきたい
- ・おがる 大館:主催研修では、一般向けということで、広くどなたでも来てくださというのが発達障がいセミナー。去年は、「発達の気になるお子さんのつながりを大切にしたい関わり方」その前は「好きを大事にした関わり方」というような内容で、幼児期の保護者支援にターゲットを絞って数年やってきた。支援者向けの研修では、発達障がい講座スタートは、基礎の基礎で1-2年目くらいの方を対象に2時間くらいで学ぶ内容になっている。スタンダードは3年目以降くらいの方々が、支援を回していくことを5時間ほどで学んでいく形になる。トピックというのは機関支援先からの課題を集めて、内容を決めている。そのほか、機関支援先から講師の依頼を受けてやる講座もたくさんある。主催研修はオンラインでやっていることが多いが、集合でやりたいなど皆さんから意見があればお聞きしたい。
- ・ぼらりす いちこ委員:わたし自身が大学で苦労した、高校から大学に行くときに進路で迷った。今の子どもたちはキャリア教育の積み上げが、丁寧な反面、いろいろ考えて決めなくてはいけないことが多い。進路を選んで決めていくこと、やりたいことを選んでいくが、実際行ってみてどうなのかということがわからない。見えないスキルについて、圧倒される姿が想像される。トスプログラムを中心にして、高校生や大学生、保護者さん含めた関係機関に向けて、実情がわかるような内容を言語化して共有していけたらいいのではないかなと思う。
- ・おがる 坂井:大学によって違いがあったり、予算の問題もあるのかなと思う。外部の機関がお手伝いできることもあるので、福祉や就労機関などと繋がっていくことが大事ではないか。今後皆さんと一緒に考えていけたらと思う。先ほどの家族支援の話になるが、教育を含めた学齢期向けに、研修会などで展開していけたらと思う。
- ・子ども部会 河内委員:トライアングルプロジェクトが新しく発動されていると思うが、教育と福祉が合同で学ぶような機会があって、共通した目的でグループワークを行ったり、そのような事例があれば伺いたい→子ども部会では教育との連携プロジェクトで児童デイの参観日など協力し

てやっていたことがあった。おがるでは常に、何か一緒にやりたいという思いはあり、お互いの役割の違いを知っていくことも重要だと思う。

- ・札幌市教育委員会 石川委員：教育と福祉の連携について大切に思っている。先生方がそれぞれの機関がどこまでできるのか知らないという現状があると思う。今年度 SSW を手厚く配置しており、ご協力をお願いすることがあるかも知れない。
- ・おがる 大館委員：私たちもいろいろなケースで SSW さんが登場する機会が増えてきたと感じている。今後も連携しながらやっていきたいと考えている。
- ・クローバー 長田委員：コロナ前に障害者職業訓練センターで卒業間近の大学生や専門学生を対象にしたキャリア教育に関する委員会に参加させていただいていた。今後の連携や取り組みに期待したい。ペアレントメンターの活動としては 14 年経過した。支援は増えてきて手厚くなっているが、それと共に、多様な相談が増えてきた。親御さんへの家族支援は、もちろんプログラムなどもあります。親御さんの気持ちが安定するような、寄り添った関わりが大切かと思う。
- ・札幌市児童相談所 武田委員：心理士でこどもに関わっている。相談内容は多岐に渡り、最近は障がいのあるお子さんに対して、保護者の方が家で見えていくのが難しいというようなお話が多くある。ショートステイをお願いしたいという相談も増えている。暴力的な問題があるお子さんたちを受け入れてくれるところの難しさがあるので、皆さんと協力しながらやっていきたい。
- ・こころのリカバリー総合支援センター中川委員：発達障がいの方の通所を行っており、家族支援もベースとしてある。プログラムのようなものはないが、ご家族と相談しながら取り組んでいる。

(4) ごあいさつ（坂井センター長より）

センターも20周年になる。発達障がいと言っても、いろいろな層があり、ある層には有効となっても、他の層は違うということがある。自閉症の定義がとても広がったりするので、そのようなことも理解していくことが重要。彼らの生活の質をどうあげていくのかということはみなさまと一緒に考えていきたいと思う。今後ともご協力をよろしくお願いいたします。